

ヨハネによる福音書3章1節から8節；「新たに生まれる必要性」－2026年3月1日

- I. ようこそ、振り返りと導入
 - A. おはようございます！おはようございます！カルバリーチャペル岩国へようこそ。主であり救い主であるイエス・キリストを礼拝するために皆さんと集まれることは、なんと祝福なことか。
 1. 初めての方、オンラインで参加している方々もようこそ。
 - B. 本題に入る前に、小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出そう。
 1. (第二礼拝：聖書英語クラスも同様)
 - C. 子供たちが退出する間、残りの皆さんは聖書を開いてヨハネによる福音書第3章に進んでください。
 1. 先週はヨハネの福音書第2章を終え、「清め」と題したメッセージを学んだ。
 2. ユダヤの過越の祭りに際してエルサレムに入城したイエスが、神殿を清めた出来事を取り上げた。
 3. イエスが神殿の境内に入り、縄で鞭を作り、その鞭で牛や羊、それらを売る者たち、そして両替商たちを追い出した様子を読んだ。イエスは机をひっくり返し、彼らの金を地面に撒き散らし、「これをここから取り除け。わたしの父の家を商売の場にしてはならない」(ヨハネ2:16)と言われた。
 4. この力強い権威の示しの後、ユダヤ人たちは来て、そのようなことをする権威を証明するしるしを求めた。イエスは言われた。「この神殿を壊してみよ。三日のうちに、わたしが建て直す」(ヨハネ2:19)。
 5. しかし、これはヘロデが再建した物理的な神殿のことでなく、御自身の体について語られたのだ。復活のしるしを指してのことである。
 6. イエスは過越の祭りと種入れぬパンの祭りの一週間、エルサレムに留まった。ヨハネは、イエスが他にも多くのしるしを行い、多くの人々がイエスの名によって信じたと記している。しかしイエスは彼らに自分を委ねなかった。
 7. 応用として、三つのことを考えた。警告、招き、そして勧告である。
 - a. 私たちは、礼拝が便宜や自己奉仕の手段になってはならないと戒められた。
 - b. 我々は自らに言い聞かせた。主を招き、自らの体の神殿を清めていただく必要があると。主が我々の心を調べ、主が明らかにしたいと願うあらゆるものを清めてくださるようにと。
 - c. そして私たちは、イエスが自らを私たちに捧げられたように、自らの人生をイエスに捧げるよう勧められた。究極的には、カルバリの十字架の上で、私たちのために御自身の命を捧げられたのだ。
 8. そして、その章はそうして終わった。
 - D. 今日、私たちはヨハネの福音書第3章にたどり着いた。この章には、聖書全体で最も引用される節の一つが含まれている。ヨハネ3章16節「神は、そのひとり子を賜ったほどに、世を愛された。それは、彼を信じる者が、ひとりも滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ3:16)

世を愛し、御子をお与えになった。それは御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:16)

1. やがて16節まで進むが、今朝はそこまで行かない。今日は最初の日曜日だから、聖餐式に十分な時間を割きたい。16節までには間に合わないだろう。
 2. だから今朝は、第3章の最初の部分だけを取り上げる。そして主が許せば、おそらく来週には16節まで進むだろう。ただし確約はしない。主がどのように導かれるかを見極めながら進める。
- E. 本日の聖句はヨハネによる福音書第3章1節から8節までとする。この学びの題目は「**新たに生まれる必要性**」と定めた。
 1. さて、皆さんはもうヨハネの福音書第3章まで読み進めているだろう。もしそうなら、主とその聖なる御言葉に敬意を表して、立ち上げられる者は皆、立ち上がってほしい。私は自分の聖書から本文を読む。各自の聖書と一緒に読んでほしい。
 2. 愛する弟子ヨハネは、福音書の記録を第3章1節で次のように続ける... (朗読と応答)
- II. イントロ
 - A. 今日、今日の聖句は、イエスとニコデモという人物との対話の始まりを記している。議論の主な主題は「生まれ」について、特に「新たに生まれる」ことに関するものだ。
 1. この八節の聖句の中で、ヨハネは「生まれる」という言葉を八回使っている。
 2. この「生まれる」という言葉の繰り返しを示すのは、これが非常に重要な概念であり、イエスがニコデモに霊的な真理を伝えるために繰り返し語ったことだということだ。
 - B. 聖書の箇所を読み進める中で、イエスが語られた「生まれ変わる」ことに関する重要な真理を明らかにしていくつもりだ。
 - C. 「生まれ変わる」という言葉は、私が信仰を持つ前、クリスチャンになる前には、私を混乱させていたものだ。
 1. かつて私は「生まれ変わる」とは、ある特定のタイプのクリスチャンを表す言葉だと思っていた。つまり「生まれ変わったクリスチャン」とは、キリスト教のまた別の宗派のように、単なる別のタイプのクリスチャンに過ぎないと考えていたのだ。
 - a. バプテスマ派のクリスチャン、メソジスト派のクリスチャン、長老派のクリスチャン、福音派のクリスチャン、ペンテコステ派のクリスチャン、そして生まれ変わったクリスチャンがいる、というように。単なる別の種類のクリスチャン、プロテスタントの別の形態だと思っていたのだ。
 - b. 主と共に歩み始めた頃、生まれ変わったクリスチャンとバプテスマ派のクリスチャン、あるいは他の種類のクリスチャンとの違いについて尋ねたことを覚えている。
 - c. 最初に尋ねた相手は、最初は少し笑ったが、続けて説明してくれた。キリストを真に信じる者は皆、生まれ変わったクリスチャンだということだ。生まれ変わることは特定のクリスチャン種別ではなく、単にクリスチャンであることそのものだ。クリスチャンであるということは、生まれ変わったことを意味するのだ。

2. この「生まれ変わる」という表現は、今日の聖書の箇所と、イエスがニコデモという男と交わした会話に遡ることができる。

D. では、聖書に戻ってイエスが「生まれ変わる」ことについて何と言っているか見てみよう。始めに1節と2節を一緒に読んでみよう。

III. ヨハネによる福音書3章1-2節；イエスのもとに来た人

A. 聖書の本文は、ニコデモという人物について語り始める。聖書が教えるところから、彼について何を知っているだろうか？

1. まず、1節によればニコデモはパリサイ人であった。

- a. ヨハネの福音書でファリサイ派が言及されるのはこれが初めてではない。第1章で、洗礼者ヨハネを問いつめにやってきた祭司やレビ人たちが、実はファリサイ派から遣わされた者たちだと述べられていたからだ（ヨハネ1:24）。
- b. ファリサイ派という言葉は、ヘブライ語の「分離した者たち」を音訳したものである。これはファリサイ派を的確に表現していた。彼らは自らを他者から分離し、律法の最初の五書であるトーラーに従うだけでなく、口伝の律法にも生涯を捧げていたからだ。
- c. 口伝律法とは、基本的にトーラーに関するユダヤの長老やラビたちの解釈や注釈であり、代々口頭で伝えられてきたものだ。後にこれらは収集され、ミシュナーとして出版されることになる。
- d. 口伝、すなわち新約聖書全体で一般的に言われる「長老たちの伝統」は、律法の最も細かい部分に至るまで極めて厳格な遵守を伴っていた。長老たちは神の律法を取り上げ、そこに自らの解釈を加えて、何が許され何が禁じられているかを誰もが正確に理解できるようにしたのだ。
- e. 例えば、モーセの律法の第四戒はこうだ。「安息日を覚えて、それを聖なるものとせよ。六日間は働いて、すべての仕事をしなさい。しかし七日目は、あなたの神、主の安息日である。その日には、仕事をしてはならない…」（出エジプト記20:8-10a）
- f. つまり神は休息の日を取り、主を敬うよう命じた。しかし長老たちは「仕事」の定義を明確にしないで、この単純な戒めから39もの異なる仕事の分類を生み出した。そして何が仕事に該当し、何が該当しないかの具体例を列挙した。やることとやらないことの長いリストだ。
- g. ファリサイ派は些細な細部まで守ることを誇りにしていたが、神の心を見失っていた。イエスは後に彼らの偽善を非難し、「ああ、律法学者やパリサイ人、偽善者たちよ。ミントやアニスやクミンは十分の一税を納めるが、律法より重要な事柄、すなわち正義と慈しみと誠実さを怠っている」（マタイ23:23a）と宣告した。

h. イエスは彼らを「盲目の導き手よ。蠅は濾しながら、らくだは飲み込む者たちよ！」と呼んだ（マタイ23:24）。

i. またこう言った。「ああ、律法学者やパリサイ人、偽善者たちよ。お前たちは杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強奪と放蕩で満ちている」（マタイ23:25）

j. 彼らは外見を良く見せようとした。敬虔で義人らしい生活で他人を感心させようとした。他人に見られることに集中し、見せかけにこだわったが、内面は腐敗し、偽善と不法に満ちていた。

k. イエスはファリサイ派について、あまり良いことは言わなかった。

2. 他に何を知っているか？ 1節の終わりによると、ニコデモはユダヤ人の指導者だった。

- a. これはニコデモがサンヘドリンと呼ばれるユダヤの統治機関の一員であったことを示している。
 - b. サンヘドリンは、イスラエルの地を支配した外国勢力から、特定の宗教的・民事的・刑事的問題に関する限定的な権限を認められていた。
 - c. 一世紀にはローマがそれにあたる。ローマは権力を握っていたが、ユダヤ人に対して特定の問題については自治権をある程度認めていた。
 - d. サンヘドリンは当時の大祭司が議長を務め、その他70名の社会構成員で構成されていた。サンヘドリンは主に二つの主要なグループ、すなわちサドカイ派とパリサイ派から成り立っていた。
 - e. サドカイ派はモーセの律法に従うと言いながら、長老たちの伝統の細かい部分は気にしなかった。天使や霊界や復活を信じていなかった。彼らは権力と地位に這い上がった祭司や貴族の集団で構成されていた。
 - f. ファリサイ派は往々にして、こうした分離主義者や律法学者、書記たちで構成されていた。彼らもまた最も厳格な律法を遵守していたが、それは往々にして見せかけのため、人の称賛や崇拜を得るためであった。
 - g. サンヘドリンの成員は皆、極めて強い影響力を持つ者たちだった。彼らは社会の中で非常に有力で、非常に権力のある者たちだった。
3. ニコデモが非常に裕福だったことは知られている。サンヘドリンの成員として当然のことだが、この事実を裏付ける聖書的な証拠が実際に存在する。
- a. その後、ヨハネの福音書において、ニコデモはイエスの十字架刑の後にも再び登場する。彼はサンヘドリンのもう一人の有力者、アリマタヤのヨセフという男と共に、イエスの遺体を埋葬の準備をするために来た。ヨハネ19章には、ニコデモが約百ポンドの没薬とアラオの混合物を持って来た様子が記されている。（ヨハネ19:39）

- b. 埋葬のためにこれほど大量の香料を用意できる者はごくわずかだった。これは王や最高位の貴族にふさわしい、贅沢な贈り物と見なされていた。
4. つまりニコデモは、ファリサイ派の非常に敬虔な人物だった。サンヘドリンの一員として権力と影響力を持つ者であり、極めて裕福だった。ヨハネによる福音書第3章10節によれば、彼はイスラエルの教師として高く評価されていた。(ヨハネ3:10)
- a. イエスは彼についてこう言った。「お前はイスラエルの教師でありながら、これらのことを知らないのか？」イエスは「教師の一人」ではなく「教師」と言ったのである。
 - b. ニコデモはこの時代、イスラエル全土で最も優れた教師の一人と見なされていた。彼は間違いなく神の言葉を隅から隅まで知り尽くしており、律法の教師として最高の尊敬を集めていた。
5. だからニコデモには多くの長所があった。彼は高く評価される人物だった。
- B. そして聖書は、彼が夜にイエスのもとへ来たことを伝えている。
1. さて、なぜニコデモが夜にイエスのもとへ来たのか、多くの推測がなされてきた。これは興味深い、いやむしろ重要な詳細だ。聖書でニコデモが言及されるたびに、彼が夜にイエスのもとへ来たというこの詳細が記されているからだ。
 - a. 第3章で彼が初めて登場する時、そう記されている。彼はヨハネの福音書第7章でも再び登場し、「夜にイエスのもとに来たニコデモ」と説明されている。(ヨハネ7:50)
 - b. そして、既に述べたように、十字架刑の後、ヨハネによる福音書19章で彼についてこう記されている。「ニコデモは、初めは夜にイエスのもとに来た者だが…」
 - c. 聖書でニコデモが言及される度に、彼がイエスのもとへ夜に訪れたと記されている事実は、そこに重要な意味があったと私に思わせる。
 2. ある者は、ニコデモが夜にイエスを訪ねたのは、単にイエスが昼間は忙しく、大勢の群衆に邪魔されずに話しかけたからだとして推測する。おそらくそこには一理あるだろう。
 3. また、当時の長老たちは、聖書を黙想し、他人と語り合うのに最適な時間は朝と夕べだと信じて教えを説いていたとも説明される。そうすれば日中の暑さを避けられ、穏やかな風を楽しむこともできたかもしれない...おそらく
 4. そうした事情がニコデモが夜にイエスを訪ねる決断に影響したかもしれないが、最も可能性が高い理由、あるいはおそらく最大の理由は、恐怖に基づいていたと思う。
 - a. 人の目を気にする気持ち、つまり他人が何を言うか、あるいは何をするか、特にサンヘドリンの他のメンバーが、ニコデモがイエスと一緒にいるのを見たら、彼に何を言うか、何をするか、という恐れだ。
 - b. イエスはすでにサンヘドリンの注目を集めていた。イエスは神殿を清め、現状を揺るがしていたのだ。

- c. ユダヤ人たちが神殿の清め後にイエスに問いただしたというのは、間違いなく宗教指導者たち、おそらくはサンヘドリンのメンバーたちを指している。
 - d. 彼らはイエスが行った奇跡を知っており、イエスを知らず、次に何をするか分からなかったため、イエスを恐れていた。
 - e. ヨハネの福音書の後段では、ユダヤ人たちが集まって、イエスがメシアだと告白する者を会堂から追放することに決めたという記述を読むことになる。(ヨハネ9:22)
 - f. ヨハネによる福音書12章にはこう記されている。公の宣教の終わり頃、指導者たちの間にもイエスを信じる者が現れたが、ファリサイ派の人々のため、会堂から追い出されるのを恐れて公に認めなかった。
 - g. ニコデモは、サンヘドリンがイエスをどう思っているかを知っていたに違いない。そしておそらく、この状況がイエスにとってどう展開していくかも見抜いていた。
 - h. だから、イエスと一緒にいるところを見られるのを恐れて、夜にイエスのもとに来たというのは、最も理にかなっているように思える。
5. たとえ恐怖から夜陰に紛れてイエスのもとに来たとしても、それでもイエスのもとに来たこと自体、彼を称賛すべきことだと思う。
- a. ファリサイ派であり、サンヘドリンの一員であり、極めて富み、力と影響力を持つ人物でありながら、それでもなおイエスに会おうと訪ねてきたという事実は称賛に値する。
- C. ニコデモはイエスのもとに来て言った。「先生、私たちはあなたが神から来られた教師であることを知っています。神が共におられない限り、あなたがなさるようなしるしをなすことは誰にもできないからです。」
1. ここには、ニコデモが他の宗教指導者たちとは異なり、民衆に対する権力や影響力を維持することにはばかり関心を持っていたわけではないという証拠が示されている。
 2. イスラエルの大教師であるニコデモがイエスのもとに来て、彼を「ラビ」と呼んだ。これは重要で注目すべき点だ。あらゆる兆候から、ニコデモはイエスよりもはるかに高い地位にあり、長老であり、高く尊敬される人物であったと推測される。それにもかかわらず、彼はイエスを「ラビ」と呼んだのである。
 3. この「ラビ」という言葉は「教師」を意味するが、尊敬の念を込めた呼称だった。師や指導者を仰ぎ見る弟子たちが用いる言葉である。ニコデモがイエスを「ラビ」と呼んだのは、単なる礼儀正しい挨拶ではなく、ニコデモがイエスに対して抱いていた尊敬と賞賛の証だった。
 4. ニコデモはイエスに対して敬意を示したが、同時にイエスが神から来たことを知っているとも述べた。これは他のファリサイ派や宗教指導者たちの大半が認める以上のことだった。
 - a. そこで疑問が生じる。ニコデモが「私たちはあなたが神から来た教師であることを知っている」と言ったとき、彼が指す「私たち」とは誰なのか。
 - b. 彼が宗教指導者たちを指している可能性は低いため、おそらくユダヤ人全体、すなわち

イエスのなしたしるしを見て、第2章に記されているように、その御名を信じた者たちを指している可能性が高い。

5. またニコデモは、イエスが行ったこと、すなわちイエスが行ったしるしが、神がイエスと共におられることの証拠であると認めていた。

D. ここに、イエスのもとに来た一人の男がいる。彼は非常に宗教的な人物、ファリサイ派であり、社会において極めて権力と富と影響力を持つ者、ユダヤのサンヘドリンの一員だ。彼は著名な教師でありながら、それほど地位や名声を持つにもかかわらず、心の奥底では何かが欠けていると自覚していた。

1. 彼は答えを求めてイエスのもとに来た。さらなる指針を求め、教えを請うた。彼はイエスを「ラビ（師）」と呼び、この人物から学ぶべきことがあると自覚していた。

2. 彼はイエスが神から来た者であり、神がイエスと共におられるという自らの信念を述べる。彼は探している。だが、自分が何を探しているのかは分かっていない。彼は、自分がこれほど恵まれているにもかかわらず、まだ何かが欠けていることを知っているのだ。

E. イエスがニコデモに答えて大胆な宣言をする3節を見てみよう。

IV. ヨハネ3:3; イエスの宣言

A. 注目してほしいのは、イエスがニコデモが尋ねもしていない質問に答えている点だ。ニコデモは神の王国や生まれ変わりについて何も尋ねていない。それなのにイエスはこう宣言する。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」。

1. この理由については、先週の学びの終わりに読んだ箇所まで遡ることができると思う。覚えておられるだろうか、ヨハネの福音書第2章24節と25節にはこう記されている。「しかし、イエスは彼らを信頼しなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられ、人のことを証言する者がいなくても、人の内にあるものを知っておられたからである。」（ヨハネ2:24-25）

2. イエスはニコデモの内面を知っていた。ニコデモが真に求めているものを知っていた。ニコデモが自分に会いに来た理由を知っていた。ニコデモが単に「イエスが神から来た者であり、神がイエスと共におられる」と証しするためだけにイエスを訪ねたのではないことも知っていた。

3. イエスはニコデモの心の中と、彼が本当に知りたがっていることを知っていた。ユダヤ人たちはメシアを待ち望んでおり、彼らがメシアについて信じていたことはすべて、メシアが来て神の王国を打ち立て、確立するという考えを中心に回っていた。メシアが統治し、神の民が束縛と抑圧から解放される王国である。

4. イエスは神の国を見るという主題に真っ直ぐに切り込んだ。それがニコデモの心の奥底にあった真実だったからだ。

B. 興味深いのは、ニコデモがイエスに話しかける際、最初は三人称複数形で「私たちはあなたが神から来られた教師であることを知っています」と言ったことだ。

1. しかしイエスの返答では、彼はニコデモを個別に呼びかけ、「まことに、まことに、あなたに告げます」と二人称単数で語っている。

2. まるでイエスがニコデモの心の奥底に直接切り込んだかのような。ニコデモは多少なりとも非個人的な態度を保とうとしたが、イエスはそれを許さなかった。まるでこう言っているかのような。「お前たちが何を知ってようと構わない。ニコデモよ、これはお前に対して言っているのだ。お前たち全体に対してでも、ユダヤ人一般に対してでもなく、お前個人に対してだ、ニコデモよ」と。

C. 生まれ変わるという話題や考えは、ニコデモにとって全くの未知ではなかった。なぜなら、異邦人がユダヤ教に改宗する様子を、彼らはそう表現していたからだ。

1. 異邦人がイスラエルの唯一の神を信じるようになると、改宗の過程を経る。そこには男性の割礼と全身を水に浸す儀式が含まれる。これが完了すると、異邦人改宗者は「生まれ変わった」と見なされたのだ。

2. 異邦人がユダヤ教に改宗する際、彼らは古い生活様式、家族関係、異教の習慣を完全に捨て去り、神とイスラエルの律法を完全に受け入れた。

3. ラビたちは改宗者を、生まれたばかりの子供のような存在だと説明した。彼らは全く新しい人間と見なされた。古いものは全て消え去り、全てが新しくなった。彼らの前にあるのは未来だけで、過去は消え去ったのだ。

4. しかし問題は、ニコデモは異邦人ではなかったということだ。だからユダヤ人が生まれ変わる、あるいは新たに生まれる必要があるという考えは、彼にはなかなか理解できなかった。彼はすでにユダヤ人だった。なぜユダヤ教に改宗した異邦人のように、古い生活様式を捨てて生まれ変わる必要があるのか？

D. 「生まれ変わる」という言葉は、文字通り「上から生まれる」という意味だ。それは神から生まれるという意味を帯びている。「再び」と訳された言葉はギリシャ語の「アノテン」で、「アノ」は「上」を意味し、接尾辞「-テン」は「から」を示す。つまり「上から」という意味になる。

1. これは二つの異なる意味で使われる。一つは場所や位置を指す意味で、上から見た位置を示す。

2. しかし時間の観点からも用いられ、その場合は初めから始まる、あるいは再び行うという意味を持つ。

3. だから「生まれ変わる」という概念も「上から生まれる」という概念も、イエスが語っていることに合致する。なぜならこれは神からの誕生であり、上から生まれるものであり、新たな誕生、つまり生まれ変わりだからだ。

E. さて、ニコデモの返答から明らかのように、彼はこの言葉が時間に関して用いられる側面に注目している。本文の4節にある彼の返答を一緒に見てみよう。

V. ヨハネ3:4; イエスに提示された問題

A. ニコデモはイエスに質問するが、注目すべきは「なぜ」ではなく「どうやって」と尋ねている点だ。「なぜ生まれ変わる必要があるのか」ではなく「どうやって生まれ変わるのか」と問うている。

1. これはニコデモが皮肉や冗談、無礼を言っているわけではない。むしろ、イエスの言葉に真剣に耳を傾け、その教えに従おうとする彼の真摯な姿勢を示している。なぜ生まれ変わる必要があるのかではなく、どうすればそれが可能なかを問うているのだ。彼は知りたいのだ。神の国を見たい、その一部になりたいと願っているが、その方法がわからないのだ。

B. 基本的に、ニコデモはイエスの解決策と生まれ変わる必要性を、自分には物理的に不可能なことだと見ている。年老いた自分が、どうやって母親の胎内に戻って生まれ変われるというのか。

1. いや、生まれたばかりの赤ん坊だって無理だ。一度出てきたら、戻ったりしない。そんなこと絶対にありえない。

C. 5節と6節のイエスの答えを聞け。

VI. ヨハネ3:5-6; イエスの主張

A. イエスはニコデモに、自分が語っている誕生とは肉体的な誕生ではなく、霊的な誕生であることを伝える。もしニコデモが神の国を見たい、あるいは神の国に入りたいと思うなら、生まれ変わらなければならない。水と霊によって生まれなければならないのだ。

B. さて、イエスが「水と霊によって生まれる」と言った意味については、これまで混乱があった。人々はこれを様々な方法で解釈してきたのだ。

1. 人々がこれを誤解して解釈した一つの方法は、イエスが水から生まれると言った時、それは水による洗礼を意味していたと言うものだ。
 - a. したがって、神の国に属するためには、水で洗礼を受け、神の御霊によって新たに生まれ変わり、聖霊によって新しくされなければならないと結論づけるのである。
 - b. これは救いの経験を信仰と行いの組み合わせにしてしまう。イエスを信じると同時に、洗礼を受けなければならないというわけだ。
 - c. しかしこれは、救いは恵みによる信仰を通して与えられるものであって、自分たちから出るものではない、それは神の賜物であって行いによるものではない、と教える聖書の他の明確な教えに真っ向から反するものである。それは、だれも誇るできないようにするためである。(エペソ2:8-9)
 - d. ローマ人への手紙3章は言う。「それゆえ、人は律法の行いによらず、信仰によって義と認められると結論づける。」(ローマ3:28)
 - e. ガラテヤ人への手紙2章はこう述べている。「人は律法の行いによってではなく、イエス・キリストへの信仰によって義と認められる。すなわち、我々もキリスト・イエスを信じたのは、律法の行いによってではなく、キリストへの信仰によって義と認められるためである。なぜなら、律法の行いによって義と認められる者は、ひとりもないからである。」(ガラテヤ2:16)
 - f. パウロは、自分が多くの人を洗礼しなかったことを誇りに思っていた。彼はこう宣言した。「キリストはわたしを洗礼を授けるために遣わされたのではなく、福音を直ぐ伝えるために遣わされたのだ」(コリントの信徒への手紙一 1:17a)
 - g. ローマ帝国全体に福音を広めた偉大な伝道者が水による洗礼を強調せず、重要だとも思わなかったのなら、それは救いに必要なものではなかったに違いない。
 - h. それは聖書に合わないだけでなく、ニコデモにとって全く意味をなさない。なぜなら、今日キリスト教世界が理解し

理解しているキリスト教世界における洗礼は、この時点ではまだ実践されていなかったのだ。

2. この考えを別の角度から見ると、特定の「水による洗礼」、つまり悔い改めの洗礼を指していると言う人もいる。ヨハネは悔い改めのしるしとして水で洗礼を施した。だからイエスがここで語っているのは悔い改めの必要性だと考える者もいる。

- a. 確かに悔い改めはキリストにおける新たな人生に不可欠な要素だが、イエスがここで悔い改めについて語っていると主張するのは、聖書の直前の文脈を無視している。
- b. この箇所でイエスは洗礼について全く言及していない。人々が洗礼に飛びつくのは、水が言及されているからに過ぎない。しかし、イエスが水について言及したからといって、それが水による洗礼を意味するわけではない。

3. 直前の文脈は、二種類の誕生、すなわち肉体的な誕生と霊的な誕生という概念を指しているように見える。

- a. 水から生まれるものは、肉体的な誕生を表すものだ。女性が陣痛が始まり、赤ちゃんを産もうとする時、最初に起こる兆候の一つは破水だ。
- b. 胎児を包み込む羊膜は、子宮内で赤ちゃんを安全に保護し、クッションの役割を果たすが、分娩初期に破水する。
- c. 霊から生まれるものは、霊的な再生を意味する。聖霊が私たちの心に入り込み、そこに住み着き、私たちの霊に命をもたらすのだ。
- d. この解釈は、6節でイエスが「肉から生まれたものは肉であり、霊から生まれたものは霊である」と語ったことで裏付けられるように思える。二種類の誕生、すなわち肉(水)による物理的な誕生と、霊による霊的な誕生である。

4. 別の解釈もあり得る。それは水と霊による誕生を二つの別々の誕生として語るのではなく、エゼキエル書36章で預言された新しい命と関連し、一つの誕生として起こる現象を説明するものだ。

- a. エゼキエル書36章で預言者は、主が散らされた諸国からイスラエルの民を集め、イスラエルの地へ連れ戻すことについて語っている。「わたしは清い水をあなたがたに注ぎ、あなたがたを清める。わたしはあなたがたのすべての汚れと、すべての偶像からあなたがたを清める。わたしはあなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたの肉から石の心を取り除き、肉の心を与える。わたしはわたしの霊をあなたがたのうちに授け、あなたがたをわたしの定めを歩ませる。あなたがたはわたしのさばきを守り、それをを行うであろう。」(エゼキエル36:25-27)
- b. この神の御業、すなわち水をもって民を清め、新しい心と新しい霊を与えるという約束は、上から生まれること、すなわち新しい心、石の心ではなく肉の心をもって生まれ変わる過程という文脈にも当てはまるように思われる。

5. さらに別の解釈では、水と霊は神の言葉が神の霊と協力して新しい命をもたらす様子を表しているという。
- a. み言葉は時に水と結びつけられる。
 - i. エペソ人への手紙5章では、夫が妻を言葉による水の洗いによって清める必要について述べている（**エペソ5:26**）。
 - ii. ヨハネの福音書の後段で、イエスは弟子たちについてこう語る。「わたしがあなたがたに話した言葉によって、あなたがたはすでに清くなっている。」（**ヨハネ15:3**）
 - iii. 預言者イザヤは、神の言葉を水や雨に例えている。それは地上に降り注ぎ、大地を潤し、新たな命を生み出すのだ。イザヤ書55章10節と11節にこう記されている。**[イザヤ55:10-11]**
 - b. つまり、神の言葉、すなわち福音のメッセージが伝えられ、聖霊の力によって人々の心に確信をもたらす、そのメッセージを信じ、自らを主とその聖霊に委ねるように導くという考え方だ。
 - c. これは一つの誕生であり、神の御言葉と神の御霊の組み合わせによって成し遂げられる一つの神の御業だ。
6. では、どちらなのか？ 断言するのは難しい。
- a. これは水による洗礼、キリスト教の洗礼、あるいは悔い改めの洗礼を指しているとは考えない。聖書が悔い改めの必要性を教えていることは認めるが、水による洗礼はここでの文脈全体に合わない。
 - b. 他の解釈の可能性はいくつか考えられる。エゼキエル書に記されているように、神が御民を水で清め、新しい心を与え、御霊を宿すという一つの御業との関連性は理解できる。
 - c. 救いは神の御言葉が神の御霊を通して働き、私たちに新しい命をもたらす結果だと信じている。しかし、イエスがここで具体的に言及し教えているのはそれだろうか？ そうかもしれない。
 - d. 最も簡単で分かりやすい解釈は、イエスが二つの誕生について語っているということだ。肉体的な誕生と霊的な誕生である。しかし、節ごとに例えが変わるため少し混乱する。5節では肉体的な誕生が「水から生まれる」と想定されているが、6節では「肉から生まれる」と語っている。
- C. どちらの解釈を選ぼうと、イエスがここで伝えたい核心は変わらない。根本的な点は、生まれ変わりは神の働きであって、人の働きではないということだ。
1. それは神が私たちの心と人生に働くことに基づいている。肉において成し遂げられるものではない。
 2. ニコデモの人生を考察する上で、これが最も重要な点だ。ニコデモは生涯をかけて律法に従うべく全力を尽くし、神の王国に備えられる生き方を貫いてきた。

3. 彼は神の王国に属するため、律法の細部に至るまで最善を尽くしてきた。しかしイエスがここで語っているのは、神の王国に属することは肉的努力では成し得ず、自らの力では不可能だということだ。
 4. つまり、イエスがニコデモに伝えようとしているのは、生まれ変わるために自分だけでできることは何もないということだ。それは神の働きであり、聖霊の働きなのだ。
 5. ニコデモよ、お前の行ってきた正しい行いや律法の遵守は、お前を神の国へ導くことはできない。それらは神の国を見せることもできないのだ。お前の持つ権力も、富も、影響力も、何の役にも立たない。ユダヤ人として生まれたという事実も、何の助けにもならない。なぜなら、それは肉体的なことではないからだ。肉や、最初に生まれた家族のことではない。お前は生まれ変わらなければならない。
 6. ニコデモよ、お前は生まれ変わらねばならない。それが天の国を見る唯一の方法だ。天の国に入る唯一の道だ。お前の義の行いは通用しない、富も通用しない、権力も通用しない、影響力も通用しない、偉大な教えも通用しない。それは神の働きでなければならない。聖霊の働きでなければならない。
- D. そしてイエスがニコデモに伝えたこのメッセージと要点は、私たちに同様に当てはまる。私たちの善行は誰も天国に入れさせない。教会での奉仕も、教会への献金も、善のためや主のために力や影響力を使うことも、誰も天国に入れさせないのだ。
1. 聖霊の働きによってのみ、人は新たな創造物となり、新たな命を与えられて入るのだ。
 2. イエスは後にこう証言する。「命を与えるのは霊である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに語る言葉は霊であり、命である。」（**ヨハネ6:63**）
 3. コリント人への第二の手紙5章17節にはこう記されている。「だから、だれでもキリストにあるなら、その人は新しい被造物である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなった。」（**IIコリント5:17**）
 4. 聖霊が来てキリストを証しし、我々が救い主を必要としていることを証しする。聖霊のその確信こそが、我々を悔い改めと救いの場所へと導くのだ。聖霊が我々の人生に働くことがなければ、我々は絶望的に失われてしまうだろう。
 5. 神の王国に入る唯一の道は、生まれ変わることであり、我々は皆生まれ変わらねばならない。
- E. 7節と8節を見てみよう。これでまとめ、聖餐の時へと移ろう。

VII. ヨハネ3:7-8; イエスが示した原理

- A. ニコデモは、イエスが「生まれ変わらねばならない」と言うのを聞いて、圧倒され、呆気に取られた様子だったがに違いない。イエスは彼に驚くなど言い、それから風について語り始めたのだ。

1. ここで興味深いのは、言葉遊びがあるかもしれない点だ。ギリシャ語で「風」を意味する単語は「霊」と同じ「プネウマ」という語である。もし彼らがヘブライ語で話していたとしても、ヘブライ語の「ルアハ」も同じように「風」と「霊」の両方を指すため、同様に問題にはならなかっただろう。
- B. イエスはニコデモに風について語る。風は思いのままに吹き渡り、その影響は見えるし音も聞こえるが、風そのものは見えない。風はどこから来てどこへ行くのかもわからない。そして、御霊から生まれる者もそれと同じだと述べた。
1. ニコデモは「人はどうして生まれ変わるのか」と問うた。イエスの答えは「それは神の御霊の働きだ」である。それを見ることはできず、どこから来るのかもわからない。しかし感じる事ができ、御霊の声を聞くことができ、聖霊の働きかけの結果を見ることができる。だがそれを制御することはできず、方向付けることもできない。御霊は御自身の望むままに吹き渡り、御自身が望む者の心と人生に働きかけるのだ。
 2. ニコデモは「どうやって」に囚われている。どうすればできるのか？どうすれば自分が神の国の一部だと確信し、それを見てそこに入ることができるのか。イエスの答えは基本的に「お前にはできない」だ。少なくとも自分の力では無理だという意味だ。
 3. それは神の御霊の働きであり、神の御霊は御心にかなる者の心と人生に働く。目には見えないが、感じるだろう。御霊が人生に及ぼす影響を目にし、御霊が語りかける声を聞き、イエスが必要だと悟らされ、信仰へと導かれ、御霊の御心に従う境地へと引き寄せられるのだ。
 4. イエスは基本的に、ニコデモに「それは自分の力ではできないことだ」と気づかせようとしている。彼は自分の人生における神の聖霊の働きに身を委ねなければならない。そしてそれは私たち皆にも当てはまる。私たちは皆、生まれ変わるために、聖霊の働きに自分の人生を委ねなければならないのだ。
 5. イエスは後に弟子たちに、自分が去ることが彼らにとって益になると言う。なぜなら去る時、イエスは聖霊を送ると約束したからだ。イエスはこう語った。「聖霊が来ると、その方が世を罪と義と裁きについて責めるのである」(ヨハネ16:8)。
 6. そして、彼はあなたがたをすべての真理に導くであろう。なぜなら、彼は自分の権威によって語るのではなく、聞くままに語るからである。また、彼は将来の事を告げるであろう。彼はわたしを栄光に輝かせる。なぜなら、彼はわたしのものを取り、それをあなたがたに告げるからである。」(ヨハネ16:13-14)
 7. 我々は皆、新たに生まれなければならない。聖霊が我々の人生に働くことに、皆が従わなければならない。聖霊が我々に語りかける時、聞く耳を持ち、従う意志のある心を持たねばならない。自らの人生を聖霊に委ねる意志を持たねばならない。
 8. これがニコデモが神の王国を見たり入ったりする唯一の道であり、我々が神の王国を見たり入ったりする唯一の道だ。我々は生まれ変わらねばならない！神の御霊によって生まれ変わるのだ。

VIII. 結論／聖餐式；

- A. 今朝、我々は聖餐式に与るために食卓に集まる。しかしその前に、今日ここにいる者の中で、まだ聖霊の働きに心と人生を委ねていない者に対して機会を与えたい。
- B. もしあなたがまだ新たに生まれ変わっていないなら。もしあなたがまだ、イエスへと引き寄せる聖霊の働きに心と人生を委ねていないなら。今朝、自分の心を探り、神の御霊があなたに語りかけているかどうかを耳を傾けてほしい。御霊があなたを御自身へと引き寄せ、イエスが必要だと告げているかどうかを。
 1. 何が起きているのが正確には理解できなくても、もし神の霊が君の心に働きかけていると感じ、神が君に語りかけていると感じ、その声を聞いているなら、私は君にこう勧める。霊が君に伝えようとしていることに耳を傾け、その働きに心と人生を委ねよ。それは神だけが成し得る、君に新たな命をもたらす働きなのだ。あなたがたが、神の御霊によって新たに生まれ変わるその働きに心を開き、神の子供となることを願う。
 2. もし今朝ここにおいて、聖霊が自分に語りかけていると感じるなら、今すぐ手を挙げて、神が自分の心に働いていることを公に認めてほしい。周りの人が何と言おうと、どう思おうと気にしないでいい。
 3. 手を挙げてほしい。そうすれば、私があなたのために祈ることができる。神があなたを引き寄せ続け、あなたの中で、そしてあなたを通して驚くべき働きをなさるよう。今朝ここにいる者の中で、自分の人生をイエスに委ねる必要がある者はいるか？新たに生まれる必要がある者はいるか？
 4. (生まれ変わる必要を認める者たちのために祈れ。)
- C. 聖餐式を行うため、礼拝チームと案内係が前に進み出る。主と共に過ごす時を持つのだ。
 1. 今朝ここにいる者で、まだ信仰を持っていない者は、聖餐のパンと杯に与らないでほしい。聖餐は信者が与るものであり、イエス・キリストの死に連帯し、私たちのために砕かれた御体と流された御血を覚えるために行うものである。
 2. 信者である我々には、祈り、主と共に過ごす時間を取るよう勧める。また、周囲で新たに生まれ変わる必要のある者、心と人生を主に委ねる必要がある者たちのために祈るよう勧める。彼らを神に捧げ、彼らのためにとりなし、神の御霊が彼らの中で、そして彼らを通して驚くべき働きをなさるようお願いめよ。
 3. 礼拝チームが賛美を導く間、主が導かれるままに聖餐に与れ。賛美が終わるまでにまだ与えていないなら、チームが指示するだろう。この聖餐の時、主があなたを癒し、祝福してくださるよう祈る。主と共に過ごす時間を持ちましょう。